



Title	お伽草子と女人往生の説法：『ゑんがく』『花情物語』『胡蝶物語』を中心に
Author(s)	箕浦, 尚美
Citation	詞林. 1998, 23, p. 23-34
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67414">https://doi.org/10.18910/67414</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# お伽草子と女人往生の説法

—「ゑんがく」「花情物語」「胡蝶物語」を中心にして—

箕浦 尚美

—

中世寺院での学問・注釈や説話が、中世文芸に深く関わることが明らかになつてきている。お伽草子も、例外ではない。しかし、未だ、お伽草子に現れる仏教性については、単なる信仰心の現れととらえられがちである。お伽草子と寺院との関係が確かに成了した今、その仏教的な側面というものが具体的にどうもののかということについても考へねばならないだろう。

そこで、本稿では、浄土教系の宗派で行われた女人往生の説法がお伽草子とどのように関わっているかについて検討する。

法然の「無量寿經」に説かれる女人往生論は、「無量寿經」に説かれる阿弥陀の四十八の誓願から、第三十五願を取り上げたものである。すなわち、阿弥陀仏は第十八願で「十方衆生」を救うと誓つたが、第三十五願で「女人」を救うと再度

誓つたことにより、比叡山などの多くの靈地から排斥される障り重き女人にも往生が約束されたのだという解釈である。

この論は、「女人往生集」や「女人往生聞書」などの中世談義本にも見られるが、阿弥陀の誓願を説くために、女人禁制の地や女人の罪障を言つた経文を列挙して女人の罪障を強調するのが特徴である。女性蔑視とも見えるこのような論が本当に法然の思想に基づいたものなのかどうかについては議論があるが、この美麗な修辞から成る説法の言説は、「ゑんがく」、「大仏供養物語」、「花情物語」、「胡蝶物語」などのお伽草子にも現れる。お伽草子以外では、法然の説法に関する「曾我物語」卷十二「少将法門の事」にも見られる。<sup>3</sup>これらは、いずれも、物語中で説法を行うという形で現れるが、談義本の文辭にかなり近い文辭を持つものとそうではないものがある。このことは、実際に広く行われた女人往生の説法の重層性を示すものとしてとらえられるが、物語の成立基盤をも反映しているのではないだろうか。なお、「いづはこねの本地」、「祇王」、「くちきざくら」、「じぞり弁慶」、「百万物語」など、説

法の形でなくとも、阿弥陀の第三十五願によつて女人往生を説くお伽草子は多くあり、女人往生の説法を含んでいることは必ずしも特殊なことではないと思われる。

本稿では、お伽草子と談義との関わりを考えるために、談義本として享受されたと思われる「大仏供養物語」には触れず、異類発心譚である「ゑんがく」や、花の精の物語である「花情物語」や「胡蝶物語」について各々の作品の性格を考えることとする。

西尾市岩瀬文庫蔵の奈良絵本一本のみが知られる「ゑんがく」は、猿「ゑんがく」の発心往生譚である。黒田佳世氏が、後半部分に描かれる寺社巡りから、その景観年代を天正四年（一五七六）から九年と推定されている。成立もそこからさほど下らない時期であろうか。女人往生の説法に関する部分は次のような内容である。

世の中の無常に、出家を決意した「ゑんがく」は、妻の猿に出来を妨げられるのを恐れながらも、自らの固い決心を信じて打ち明け、妻に、女人往生を説く。女は五障三徳の罪が深く、三世十方の諸仏に嫌われ、比叡山や高野山などには結界の地があつて入ることもできない。しかし、阿弥陀如来は、悪人、女人を仏にしよう、五劫

「ゑんがく」の語る女人往生論は、「女人往生聞書」と同じ内容で、文辞も一致している。「女人往生集」、「女人教化集」など、女人往生を語る談義本は多くあるが、本願寺覺如の長子存覚が元亨四年（一二三一四）に著した「女人往生聞書」は、大分県專想寺蔵文明三年（一四七一）天然淨祐書写本をはじめ、寛文九年（一六六九）刊などの版本もある流布した談義本で、「ゑんがく」の作者は特にこれに親しんでおり、これを利用したのではないかと思われる。

「女人往生聞書」と「ゑんがく」の直接的な関係をとらえるために、まず、「女人往生聞書」と、他の談義本や「無量寿經釈」との違いを明らかにする必要がある。女人往生の談義本と法然の「無量寿經釈」の女人往生論を比較すると、女人禁制の地を列挙した部分など、談義本のかなりの部分は、「無量寿經釈」の文辭と重なつていて。しかし、「無量寿經釈」には、「ゑんがく」の内容説明で引用した「あらゆる三せんかい

の」のような、女人の罪障を言つた句（以下これを女人罪障の句と呼ぶ）は記されていないので、【無量寿經】と【ゑんがく】との直接関係は考えられない。談義本には女人罪障の句が記されており、【女人往生聞書】に見られる八つの句は、最初の三つが「ゑんがく」にも同じ順序で現れる。その八つの句を順に記すと次の通りである。

①涅槃經ニイハク、所有三千界男子諸煩惱、合集為一人

女人之業障

②マタイハク（涅槃經）、女人大魔王、能食一切人、現世作纏縛、後生為怨敵

③心地觀經ニイハク、三世諸仏眼墮落於大地、法界諸女人永無成仏願

④優填王經ニイハク、女人最為患難一、縛著牽人入罪門

⑤寶積經ニイハク、一於女人能失眼功德、縱雖見大蛇不可見女人

⑥阿含經ニイハク、一於女人永結三途業、何況一犯定墮無間獄

⑦智度論ニイハク、清風無色猶可捉、蛇含毒猶可触、執劍向敵猶可勝、女賊害人難可禁

⑧唯識論ニイハク、女人地獄使永斷仏種子、外面似菩薩内心如夜叉

【女人往生集】には、①⑧③の順、「女人教化集」には、⑧③⑦②①の順で引用されている。日蓮の著作にも、「法華題

目抄】に①③⑦⑧、「女人成仏鈔」に③⑧、「法華初心成仏抄」に②③⑥⑧というように、多くの句が見られるが、物語などに引用される句は限定されているようである。④⑦は、「女人往生聞書」本文に示されている經典の文句であるが、その他は經典に見出せず、平安時代に日本で作られたと考えられており、①⑥⑧の句の初出は【宝物集】（卷五 不邪姪）である。延慶本【平家物語】（卷六末）に①、「河海抄」（卷十三）に①⑧、「曾我物語」（卷十二「少将法門の事」）に③⑧、「常盤問答」に①がある。お伽草子では、「大仏供養物語」に①②③⑥⑧、「花情物語」、「胡蝶物語」に①⑧、「いそざき」、「硯わり」（広島大學国文学研究室藏本）、「淨瑠璃物語」（赤木文庫藏絵巻）に⑧が引用されている。このように、法然の説法に直接関わる【大仏供養物語】や【曾我物語】以外の物語にも見られるが、その場合には、主に、「宝物集」にも見られる①⑧が中心である。一方、談義本では、前に記したように、多くの句が引用されている。従つて、「ゑんがく」や「大仏供養物語」が①⑧以外の句を引用することも、談義に近いことを示していると言えるだろう。そして、「女人往生聞書」と「ゑんがく」は次頁の【表】の部分までもが一致する。

この部分は他の談義本には見られない。従つて、「ゑんがく」はいくつかある淨土教系の談義本の中でも、「女人往生聞書」にもつとも近く、恐らく、それを直接、利用したと考えてよいと思われる。

【表】

「ゑんがく」	「女人往生聞書」
<p>をんなは、めにみえて、つ みはつくらぬやうなれと も、たちゐ、おきふしに、 おもふ事は、さいこうにあ らすと、いふ事なし あしたには、かみにむか ひて、まゆすみの、よそは ひをかひつくるひ、ゆふへ に、いしやうに、たき物 かうはしく、あひしやくを もつて、思ひとし、ねたみ そねみをこと、せり 身をいみしく、おつとを、 いやしくかるしめ、しんい をさかり、これしかしなか ら、りんゑの、こうるんな り、かみをなで、かたちを かさる事、しやうし、しや うしの、きつななり</p>	<p>マサシキ目ニアラハレタル ナ罪トヲハツクラサル様 ナレトモ、行住坐臥ノフル マヒ、昼夜朝暮ノオモヒ、 罪業ニアラストイフコトナ ク、悪因ニアラストイフコ トナシ。アンタニハ明鏡ニ ムカヒテ青黛ノヨソホヒヲ カイツクロヒ、ユフヘニハ 衣装ニタキモノシテ香 ハナハタシカラソトヲオ モヘリ。愛者ヲモテオモヒ トシ、嫉妬ヲモテコト、セ リ。身ヲ執シヒトヲソネム コ、口、シカシナカラ輪廻 ノナカタチトナリ、カミヲ ナテカタチラカサルワサコ トク生死ノミナモトナ リ。</p>

【女人往生聞書】に親しんでいて、物語に合わせて適當な部分をうまく組み合わせて利用したということを示していると考えられる。また、「ゑんがく」の文辞は、【表】の部分では、「女人往生聞書」で漢語の左側に「アキラカナルカ、ミ」、「カウハシカラシコト」などと振られている訓に近く、女人罪障の句の引用部分では、「女人往生聞書」で「コノ文ノコ、口ハ」として訓読している部分と一致し、その訓読文中でも、「縛縛」(②の句の語)を、「まとはりて」とするように、左訓に近いが、「女人往生聞書」の言説を自在に操ることのできる人物が「ゑんがく」を作ったとする、「ゑんがく」の文辞は、実際の「女人往生聞書」の言説を反映していると思われる。

さて、「ゑんがく」が「女人往生聞書」を利用して作られているということは、黒田佳世氏が、寺社巡りの景観年代を割り出されたことと併せて、この物語が仏教的な啓蒙を中心とした作品であるということを示していると言えるだろう。「ゑんがく」は、地味な作品で、異類物という以外には、あまり注目されてこなかつたが、その説法や寺社巡りを具体的にとらえ直すと、まさに、それを取り入れるために作られた物語として見えてくるのではないだろうか。なお、物語中で示される説話の中には、弘法大師説話など、一般に知られるるものとは少し異なつたものがあるが、作者の知識基盤を知る手がかりになるかも知れない。

しかし、「女人往生聞書」と「ゑんがく」の言説は、順序までも全く同じというわけではない。これは、作者が普段から

「花情物語」と「胡蝶物語」は、ともに、女性の姿に変じた花の精が聖を訪ね、説法に感動して歌を詠む物語である。草木の精が聖を訪ねるというこののような趣向は、謡曲「芭蕉」、「半蔀」、「杜若」などにも見られ、珍しくはないが、この二つの物語には、共通した和歌が多く含まれており、何らかの関係があると思われる。花づくしの題で正保三年（一六四七）刊本や延宝頃の無刊記本もある「胡蝶物語」の粗筋を示すと次のような内容である。

花を好むために、京童に「胡蝶」と名付けられた男が母を失う。無常を感じ、釈迦でさえ、死からは逃れられないことなどに思いを巡らし、東山に遁世する。人々に崇められ、「弥勒上人」と呼ばれるようになるが、更に俗世を離れないと、北山の奥に移って庵を結ぶ。ある夜更け、老尼と高貴な女房達が三十人ほど訪れ、教化を乞うので、魔縁の者かと怪しみながらも説法を行う。女人罪障の句や女人禁制の地をあげて、女人の罪障の深いことを示し、釈迦如来の慈悲によつて救われると説く。さらに、「法華經」の妙文「草木国土悉皆成仏」や禪で用いられる「迷故三界城、悟故十方空、本来無東西、何所有南北」といった句も利用しながら説法を進め、女で

あつても妄念を切り捨てて仏を頼めばよいと説く。女房達は隨喜の涙を流し、かつて上人（胡蝶）に愛された花の精であると明かし、花の名を読み込んだ釈教歌を詠んで去っていく。

「胡蝶物語」は、伝本に、後水尾天皇（一五九六—一六八〇）作と伝える国会図書館蔵写本などもあり、刊本もあって広く読まれた趣深い作品である。これに対して、「花情物語」は、聖のもとに花の精変じる女房がやつてくるという単純な設定で、物語の筋に直接は関わらない説法部分が長く、一貫して女人往生論を中心としており、「胡蝶物語」の説法が比較的短く、宗派に固執しないのとは対照的である。

「花情物語」は、高山市歓喜寺に一本のみが伝わっている。同寺には他に、「秋月物語」、「西行の物かたり」、「常盤物語」、「滝口物語」があり、「常盤物語」の奥書には「寛永八年九月上旬 よま どうわん様御筆」とある。「等安」は、高山市照蓮寺十三世宣明（一五六五—一六四二）の号で、歓喜寺の祖である治部卿明了（一六一九—一六九五）は、彼の次男である。照蓮寺は、飛騨国の浄土真宗の拠点となつた寺院で、寛永十八年（一六四二）には東本願寺法主宣如の娘が降嫁している。刊本もある「胡蝶物語」に対し、女人往生の説法を強く説いたこの物語が浄土真宗の寺院に伝存することは、物語の成立や享受を考える点で興味深い。お伽草子には異本が多く存在し、この二つの物語にも、その中間形態や粗本となるべき物

語がある可能性も否定できないが、ここではこの二つのうちどちらが先行するのかを検討しつつ、それぞれの作品の性格を考えることとする。

まず、説法の女人往生に関する部分を比較してみる。【胡蝶物語】はいろいろな宗派の説法を取り入れているが、その中に女人罪障の句や女人禁制の地を記した部分もあり、末尾は、

しやかによらいの、御ちひの、ありかたさは、一ねんす  
いくの、くとくして、むりやうさいの、つみをめつし、  
そくしんしやうぶつと、とき給ふ

となつてゐる。はつきりと「阿弥陀如来」とは言つていなか  
が、花の精の扮する女房が聖に、

五きやく、十あくのもの、女人、ひしやう、草木までも、  
たすけたまはんとの、ほとけの、御せいくわんにては、  
候はすや

と、教化を求めている部分もあることから、これは女人往生の説法である。【花情物語】とほぼ同じ文辞で、女人罪障の句とともに、最も一般的な、①③が引用されている。しかし、その引用の微妙な違いに、それぞれの作品の特徴が現れてゐるようである。①の句は、「女人往生聞書」には、

涅槃經ニイハク、所有三千界男子諸煩惱、合集為一人女  
人之業障。コノ文ノコ、ロハ、アラユル三千界ノ男子ノ  
モロくノ煩惱ヲアハセアツメテ一人ノ女人ノ業障トス

トナリ。

とある。【花情物語】にも、  
ねはん經には、あらゆる三千界のなんしの、もろくの  
ほんなふ、さいしやうを、合あつめて、女人一人の、こ  
つしやうとす

とあり、「女人往生聞書」の「コノ文ノコ、ロハ」以下の訓読文とほぼ一致する。しかし、【胡蝶物語】には、

ねはん經に見えたるは、三千大せんせかいのもろくの  
なんしの、ほんなふを、合せて、女人一人の、こつしや  
う「と」す

とあり、「アラユル三千界」が「三千大せんせかい」、「アハセアツメテ」が「合せて」となつてゐる。このことは、【胡蝶物語】が、談義本に近い文辭を持つ【花情物語】を、物語として読みやすい文章に作り替えたという印象を与えるが、必ずしも【胡蝶物語】が後出であるとは言えないようである。⑧の句は、「女人往生聞書」、「女人教化集」、「花情物語」では、「唯識論」の句とされているが、「胡蝶物語」では、①に続いて「あるひは又」と示され、「涅槃經」の句であると言つてゐる。この句は第二種七卷本系「宝物集」、「大仏供養物語」などでも「涅槃經」の句とされており、「胡蝶物語」は「花情物語」以外の何かから引用したのではないかと考えられるのである。また、「胡蝶物語」には、

唐の白楽天か、ことはにも、人むまれて、女人の身とな

る事なれ、百年のくらくは、たにんによれりとあり  
という、白居易の新樂府「太行路」によつた部分があるが、  
これは、「花情物語」ではなく、「女人往生聞書」に見られる。  
このような僅かな違いから前後関係を決めるのは難しいが、  
少なくとも、「花情物語」の作者のみならず「胡蝶物語」の作  
者も、女人往生の説法を知つていて用いていることは  
言えるだろう。女人往生の説法は「胡蝶物語」のような宗派  
に偏りのない作品の説法にも採用されるほど代表的なものと  
して親しまれていたのである。

次に、多く重なる文辭を持つ歌の部分について検討する。

「花情物語」では、草庵に暮らす聖が、秋の「さひしさに」、  
次のような歌を詠む。

こゑを聞、色をみるにも、世の中に、心とまらぬ、墨染  
の袖

あすとしも、しらぬ庵の、窓の内に、しはしはやとせ、  
山の葉の月

「胡蝶物語」では、聖のもとに人が集まりすぎたため、それ  
を「うとはしく」思つて、  
こゑをきく、いろを見るにも、世の中に、こゝろとまら  
ぬ、すみそめのそて

ひとり世を、のかれてすめる、庵なれば、のきもる月も、  
いとほしきかな

と詠む。それぞれ、「さひしさ」、「うとはし」さを詠んだ歌で

あると言ひながら、一首目は共通している。しかし、これは、  
厭世觀の歌で、「さひしさ」を詠んだ歌ではないだろう。従つ  
て、この部分は「花情物語」の方が「胡蝶物語」よりも後に  
作られていると思われる。その改変の際に、「一首目は明らか  
に「うとはし」さの歌であるので差し替えたが、一首目には  
「うとはし」さが強くは感じられなかつたのでそのまま利用  
したのではないだろうか。

もう一点、成立の前後関係を考える手がかりとして、「花  
情物語」の、花の精が詠む歌に関して考えてみる。「花情  
物語」では、夕顔、萩、女郎花、常夏といふ順で十五の花が歌  
を詠むが、聖のもとに訪れる尼や女房の様子が、その順序に  
一致する。

まず、「六十あまりの尼君」が訪ねてくる。「色はあくまで  
白くして、青ねりぬきの、したきぬに、ねりぬきの、ゑ、打  
かつき」とあり、白い花をつける夕顔を想像させる。次の「は  
たちはかりの女房」は、「はきむらさきの、下かさねに、うす  
色のきぬ、かみにかけ、世にやさしけに、露おもけなるふせ  
ひ」で、萩の色や、その様子を想像させる。また、「露」の語  
は萩の歌にも使われている。その次に、「十七八と、おほしき  
女房」が、「柳重の、そめ小袖に、くちは色のうすきぬ、打か  
つき」やつてくる。「柳重」は葉の色を示し、「くちは色」は  
女郎花の黄色の花を示している。そして、

おなし人間とは、申せとも、かゝる女人の身をうけて、

五障の雲、あつくおほひ、三せうのつみ、たゑかたし、かやうに、つたなき身なれは、御聖のけちゑんに、あつかりまいらせんために、あたし野の、草ふみわけて、参りたりとて、是も座敷になをり

とあつて、女郎花の歌にも用いられる「あたし野の」という言葉が用いられている。さらに、「十四五ばかりの女房」が、「しらうらかさねの、十二ひとへに、こうはいのうすきぬ、かみにかけ」で登場する。これは淡紅色の花をつける常夏、つまり、撫子である。この女房は、「身なし子」であると言い、「いと、おもひはますか、み、おもかけに立、父は、の、とこなつかしき明暮は、ほんなふの、ちりをはらへとも、猪まふしゆうの露なみた」と、父母への思いを語る。常夏の歌は「法を聞は、なを一人に、父母の、とこなつかしき、花のゆふ露」である。その後にも色とりどりの装束の女房が続く。それらの女房は歌を詠んだ花とは対応していないが、最初の四人についてとは、最初の四つの花と考へて間違いあるまい。

これに對して「胡蝶物語」では、「うすあほのきぬに、ねりぬき、かみに、うちかつ」いた「六十に、あまりたるらんと、おほしき、あま」のあと、「やなき色のきぬきて、うすむらさきのこそて、かみにかつ」いた「二八はかりなる女房」、「うすもえきのきぬきて、きなる小袖、うちかつ」いた「十四五ばかりなる女」と続く。これらの女房の姿も花の精であることを感じさせるが、具体的にどの花であるかは示していない

と思われる。また、それぞれの人物を説明する文辭を「花情物語」と比較してみると、「花情物語」で三人目（女郎花）にあたる「二八はかりなる女房」は、

みつからも、御あとをしたひ、参り候、五しやう二しうのくもあつぶして、しん「に」よの月を、すます事なし、いま、あひかたき、ゑんにひかれて、これまでまいりたる事こそ、うれしうさふらへ、いかさまにも、上人の、御をしへにまかせ、末のやみちをはらしまいらせんとて、露にしほれ、なみたにむせひてそらいしける

とある。前に示した「花情物語」の場合とほぼ同じ内容であるが、「あたし野」の語はない。四人目（常夏）にあたる「十四五はかりなる女」では、「父は、の、とこなつかしき」が、「ち、は、のこと、なつかしき」となっている。「胡蝶物語」の歌は、夕顔、萩、女郎花、桔梗、百合というように続き、常夏の歌はなく、後の方に別の内容で撫子の歌がある。このように、女房と花の対応は「花情物語」のみに見られる。もし、「胡蝶物語」の方が後であるならば、女房の服装や様子を記した言葉を微妙に変化させて、無理に対応させないようになることになる。よつて、「花情物語」の方が工夫した部分ではないかと思われる。

前にも述べたとおり、お伽草子の常として、この二本以外にも交渉のあつた物語の存在の可能性は否定できないが、以上のことから、「花情物語」は、「胡蝶物語」を利用して作ら

れたのではないかと考えられる。つまり、「花情物語」は、既存の物語を利用して、自派の説法を重視した物語として作られ、その際に、宗教的な面以外にも手を加えて面白く読ませようとした作品なのではないかと思われる所以である。また、「花情物語」の説法の文辞は、「胡蝶物語」よりも談義本に近いが、「花情物語」の作者や享受者にとっては、「胡蝶物語」のような、女人往生の談義を聞き慣れていない者にもなじみやすい文辞よりも、実際の談義に近い方が、かえつて、親しみやすかったということを示しているのではないだろうか。

さて、女人往生の説法を「胡蝶物語」の作者もよく知つていただろうということは前にも述べたが、こちらも、宗教的な啓蒙を意図した物語だったのだろうか。「花情物語」では、聖の説法の中で、女人往生に関わりの深い阿弥陀仏と関連して、「胡蝶物語」では、冒頭で、「胡蝶」の無常觀を示すために、とともに、釈迦伝が挿入されている。そこで、青年の頃の釈迦が宮殿の東西南北の各門を出て、老・病・死・無常を知つたという「四門出遊」の場面を比較してみる。

「花情物語」では、「四門出遊」に、お伽草子によく用いられる「四方四季」の趣向が組み合わされたものが用いられてゐる。例えば、王宮の東は春の景色で花が咲き乱れていていながら、それを見に行くと老人に会う。次の日、南の夏の景色を見に行くと、老人は病にかかっているというように展開する。「釈迦の本地」にも、これと似た文辭がある。<sup>(2)</sup>しかし、「胡

蝶物語」には、淨飯王が釈迦のために「四方四季」を用意したこととは記されているが、釈迦伝本来の「四門出遊」がない。<sup>(2)</sup>このことは、一見、「胡蝶物語」が風流な「四方四季」を重視して、釈迦伝を軽視したことと示して、いるかに見える。しかし、実は、「胡蝶物語」では、「胡蝶」の無常觀を示すという文脈の中で、

されは、「三」世れうたつの、御仏たに、無常のをきては、のかれさせ給はす、況や、にんげんにをいてをやと、釈迦でさえ死を免れ得なかつたのだということを引き出すためだけに、釈迦伝全体が述べられているのである。<sup>(2)</sup>そのような一挿話としては、「四門出遊」までを記すことは分量的に無理であろう。実際、「四門出遊」がない以外は、「花情物語」とほぼ同程度の細かさで釈迦の誕生から涅槃までが記されており、物語に破綻を来すのではないかと危惧されるほどなのである。このように、「胡蝶物語」が無理に釈迦伝を挿入していること自体、それを含むことを重視したことと示していると言つてよいだろう。末尾に、

このさうしを、見たまはん人は、じひ正直を、もつはらにして、とんよくじやけん、れんほ、あひしう、もろくの、あくこう、ほんの大ときの、きほひか、るときは、にんにく、じひを、たてにつき、めうがうの、りけんをもつて、これを、しつめ給ふへし

とあることにも繋がるように、「胡蝶物語」もまた、宗教的な

啓蒙をも目的とした物語であったのである。しかし、「花情物語」のように、宗派を限定したものではなく、広く読まれることを目指したという違いがあった。

#### 四

以上、女人往生の説法を含むお伽草子を取り上げ、それぞれの性格について考えてみた。「ゑんがく」のように、談義本の文辞を直接利用した例がある一方で、そうではない草子もある。室町時代中頃の成立と思われ、談義本として用いられた「大仏供養物語」の説法の言説が、必ずしも「女人往生聞書」などの文辞と一致しているわけではないことからも、女人往生の説法は時に応じて変化していたのであろうが、「ゑんがく」の例を考えると、次第にテキストに従って固定してきたかと思われる。

しかし、そうした時期であっても、全てが談義本の文辞に一致するというわけではない。「胡蝶物語」は、「花情物語」に比べ、やや談義本の文辞からは遠いようであるが、宗派を限定しない物語としてはその方が適当だと思われる。逆に、淨土教系の教えを強調する「花情物語」の文辞は、実際の説法の言説に近い方が、宗教的啓蒙の効果が期待できるだろう。本稿では扱わなかつたが、「大仏供養物語」は、特に説法部

分を重視した談義本として成立したと考えられる。本稿で扱つたお伽草子も、物語中の説法で教化するという方法を受け継いだ物語としてとらえられるのではないだろうか。

#### 注

(1) 廣田哲通氏「中世法華經注釈書の研究」(一九九三年、笠間書院)第六章「お伽草子と直談」所収の諸論考など。拙稿「勸学院物語」と天台談義所」(「詞林」二〇、一九九六年十月)では、談義所とお伽草子との関わりについて考察した。

(2) 平雅行氏は、「日本中世の社会と仏教」(一九九二年、培書房)で、顯密仏教(旧仏教)に既に女人救済の思想があつたことを指摘され、女人往生論を説いた法然の著述は「無量寿經釈」のみで、他の資料と合わせても法然がこれを積極的に説いたとは言えないと論じられている。また、今堀太逸氏は、「法然の念佛と女性—女人教化譚の成立—」(西口順子氏編「中世を考える 仏と女」(一九九七年、吉川弘文館))で、「無量寿經釈」の女人往生論が、淨土宗の布教伝道活動の中から生まれたもので、後世に増補された可能性があると述べられている。

(3) 阿部泰郎氏「女人禁制と推參」(「シリーズ女性と仏教4 巫と女神」(一九八九年、平凡社))は、女人禁制の本質に關わる論考であるが、物語に見られる女人往生の説法の様相についても論じられている。

(4) 「大仏供養物語」については別稿を予定している。

(5) 黒田佳世氏「ゑんがくの景観年代」(中野猛氏編「説話と伝記と略縁起」(一九九六年、新典社))

(6) 「女人往生聞書」は「真宗資料集成」一に、「女人往生集」、「女

人教化集》は「真宗資料集成」五に、各々收められており、本稿での引用はこれによる。なお、専想寺藏天然写本「女人往生聞書」については、黒田彰氏が「愛知県立大学文学部論集(国文学科編)」三七(一九八八年)に、影印と略解題を示されてい る。

(7) 日蓮の著作には、「無量寿經說」に由来する女人禁制の靈地を列挙した部分はない。女人罪障の句は必ずしも女人禁制の靈地を列挙する説法のみと結びついていたわけではない。

(8) ④は、「仏說優填王經」(大正新修大藏經)十二 No. 332  
七二(頁上)に、⑦は、「大智度論」卷十四(大正新修大藏經)

十五 No.1509 一六六頁上) にある。琢成「女人往生聞書」(天保三年(一八三二)七月講「真宗大系」二十八)の

出典考証では、①「大般涅槃經」卷九（大正新修大藏經十二四二二頁上）、②「大般涅槃經」卷十三（大正新

修大藏經 十一 No.374 四四〇頁中)、(6)「増一阿含經」卷一  
九 (大正新修大藏經) 一  
No.125 五九一頁) の文意をとつ

て作られた句であるとする。

10) 「日本古典文学大系」による。真名本ではない。

〔女人界圖の句について〕は、渋江文也氏、二河浩松氏注「女人界圖」の句を中心に、「仏教文學」一一、一九八七年三月、黒

木村子氏「舞曲『常盤問答』について」（語文）三五  
年四月）、田中貴子氏「『悪女』について—称徳天皇と「女人業障

〔宝物集〕には①⑥⑧が引用されているが、⑥のみ別の個所に

記されている。

(13) 「胡蝶物語」と「花づくし」の伝本の文辭には、ほとんど異同がない。

実際には經典には見られない句である。宮本正尊氏「草木國土悉皆成仏」の仏性論的意義とその作者」（印度學仏教學研究）九一一、一九六一年）参照。

「悉皆成仏」の仮性論的意義  
一一、一九六一年）参照。

(15) 「織田仏教大辞典」に、「是れ本朝禪徳の遺偈なり、何人に成るを知らず。」とある。

(16) 「胡蝶物語」と同じように、「花情物語」にも、「ほんなん、そくねはん」、「草木国土、悉皆成仏と、法華經のもんに、見えて候へは」という部分がある。天台本覚思想に關わるかとも思われるが、これはお伽草子にもよく見られ、「般化した句としてとらえればよいと思われる。しかし、「花情物語」が「胡蝶物語」を利用して作られたとすれば、その際に残つた部分であるとも考えられる。

(17) 蓮寺宣明、歎喜寺治部卿明などについては、明了の孫にあたる正覺寺淨明の記した「岷江記」(『高山別院史』上、一九八三年、真宗大谷派高山別院)に詳しい。

「秋月物語」に、「とうあん」、「よま」、「滝口物語」に、「よま」、「花情物語」の末尾に「ぬし」とやまとある。北條秀雄氏は、「歛

喜寺に残る至町時代物語集「飛驒春秋」一六一—〇、一九七一年十月)で、宣明は、「一人の女性との間にそれぞれ、一男二女を設けたが、草子が歓喜寺に伝わっていることから、「よま」「とやま」を、歓喜寺の相である治部卿明了と同腹の姉妹であつた

のではないかと推測されている。

(18) この句は、実際には經典には見られないが、本文に示したほか、【河海抄】も【涅槃經】の句とする。その他、元禄本、片仮名古活字本【寶物集】、【法華題目抄】、【女人成仏鈔】は、【華嚴經】として、【女人往生集】は、【寶經】として引用する。なお、【大仏供養物語】伝本のうち、赤木文庫藏本のみは、【大乘經】の句とする。

(19) 「太行路」の「人生莫作婦人身 百年苦樂由他人」の部分である。【曾我物語】の伝本のうち、彰考館本などは、「少將法門の事」の説法部分に白居易の新羅府「古冢狐」の「狐假女妖害猶淺 一朝一夕迷人眼 女為狐媚害即深 日長月長溺人心」を引用している。

(20) 徳田和夫氏は、【お伽草子研究】(一九八八年、三弥井書店) 第一編第二章「四方四季の風流」で、「四門出遊」と「四方四季」を合わせた趣向が、既に、日蓮の【聖愚問答鈔】に見られるることを指摘されている。【釈迦の本地】の伝本のうち、この趣向が見られないのは慶長十六年(一六一)書写的彰考館本【釈迦物語】、【室町時代物語集】四所収)のみであるが、黒部通善氏は、【室町時代物語】「釈迦物語」—「釈迦經典への志向」(愛知学院大学論叢一般教育研究)三三一四、一九八六年三月)で、同伝本は、日本的に変容した「釈迦の本地」を否定して、仏傳經典によつて修正した伝本であると論じておられる。

(21) 【胡蝶物語】の文辭は、「釈迦の本地」や【花情物語】の文辭とは異なる。

(22) 【花情物語】のこの部分は、簡潔に釈迦の涅槃のみが記されている。【花情物語】は、釈迦伝を説法部分に移動させたために、よ

り詳しく述べることができたと考えられる。  
\*本稿で使用したお伽草子の引用本文などは、特に断らない限り「室町時代物語大成」によつている。

(みのうら・なおみ 本学大学院博士後期課程)